

教職大学院における教育評価の力量形成 —音楽科教育における評価の事例—

清村百合子

京都教育大学 音楽科

1 はじめに

本稿では、音楽科教育の評価の事例を取り上げ、教育評価のために教職大学院においてどのような力量を形成すべきかについて考えたい。論を進める前提として、本稿では「教育評価」を「教育活動の評価し、改善する営みであり、その目的は子どもたちを値踏みして、序列・選別するのではなく、教育活動それ自体に反省を加えて、教育活動を修正・改善するためにおこなうこと」¹⁾に依拠する。

音楽科はいわゆる技能教科として位置付けられ、「歌が上手に歌えているか、音程が正しくとれているか」など技能だけを見ればよしとし、多くの教師は学期末の実技テストのみで音楽科の評価ができると考えてきた傾向がある。これらの課題を抱える音楽科にとって平成 29 年学習指導要領改訂とそれに伴う評価の新観点は課題を克服する契機になったといえる。

2 平成 29 年改訂学習指導要領と評価の観点

平成 29 年の学習指導要領改訂に伴い、各教科で育成すべき資質・能力の捉え直しがなされ、評価観点についても全ての教科で「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点に整理された。全教科共通の観点になったということが音楽科において大きな意味をもつ。音楽科の活動だけに対応する閉ざされた資質・能力ではなく、あらゆる場面に共通の汎用的能力として示されたことで、他教科と別次元にある技能教科ではなく、人間形成にかかわる学力育成に貢献する一教科として他教科と同等に位置づけられたことになる。

3 音楽科授業の更新

各教科で育成すべき資質・能力が明確に示されたことで、次の三つの「転換」がこれからの音楽科授業を変えると期待している。一点目は「学力観の転換」である。学校教育法第 30 条第 2 項において学力の要素として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の三点が示されている。なかでも「思考力・判断力・表現力等」は「生きる力」の核心とされ、正解のない未来を生きる力としてこれらの資質・能力をより育成していくことが求められている。音楽科の授業でもこれまでは演奏技術の習得や作曲家や楽典に関する知識が学力の中核にとらえられてきたが、これからは音楽的思考や知覚・感受、発想、創造といった能力が重要視されるようになった。

思考力が重視されるようになると、子どもが自分で考え、判断するという学習者主体の授業が求められる。つまり二点目は「授業観の転換」である。それは行動主義的な学習観から構成

主義的な学習観への転換である。教師から指示を受けて演奏表現を仕上げる授業から、これからは子ども自身の内面をかかわらせて作品や表現を生成する授業へと転換が図られる。

こうした構成主義的な学びでは学習の結果としてどのような知識や技能が獲得されたかより、そのプロセスに働く力をみていくことが求められる。つまり三点目「評価観の転換」である。それは、冒頭で述べた通り、これまで音楽科の評価では「歌が上手に歌えているか」といったように学習の結果としてどのような技能が身についたかという最終的に仕上がった演奏のみが評価の対象となっていたが、これからはそういった演奏表現を作り上げていく過程にどのような音楽的思考が働いていたのか、プロセスをみていくことが求められる。

4 「パフォーマンス・スタンダード」の開発

では音楽科の学習のプロセスに働く資質・能力とは一体何か。その手がかりとして日本学校音楽教育実践学会が平成28年度～令和3年度にかけて開発した「パフォーマンス・スタンダード」²⁾を紹介したい。

スタンダードを支える理論的根拠はJ・デューイの経験論に基づく「生成の原理」である。それは、子どもが教材（音楽）と相互作用し、外側に音楽や作品を生み出すことと連動して、自分の内側（思考、イメージ、感情など）も新たに变化していくという考え方である³⁾。そうした経験のつくりかえに働く能力として「興味」「コミュニケーション」「音楽的思考」「知識・技能」があり、幼～高までの発達段階別にそれぞれの能力を実現している具体的姿を記述したものが「パフォーマンス・スタンダード」である。「パフォーマンス・スタンダード」は評価の三観点と相関関係にあることから観点別評価を実施するときの手がかりにもなる。スタンダードを活用した授業者からは「子どもたちがその能力を発揮できるような場面を意図的につくるようになった」「ワークシートもただ感想を書かせるものではなく、意図的なフォーマットにした」「単元で期待する子どもの姿が具体的に変わった」と声があがっている。

5 まとめ

最後に「教育評価のために教職大学院においてどのような力量を形成すべきか」という問いに対して、本稿では「①子どもが内面を発揮できる授業デザイン力」「②子ども理解のための洞察力」の二点をあげる。教師は子どもを評価する評価者である前に、子どもの内的思考を発揮させ、それを育てる環境をつくるという役割をもつ。それが「授業デザイン力」である。また評価は本来子どもを値踏みするために行う行為ではない。子どもがいま何に興味をもち、どのような問いをもち、どこに向かおうとしているのか。私たちは評価をするために子どもを観察しているのではなく、子どもたちを育てる一教育者として、子どもの内面を共感的に理解しようとしていることを忘れてはならない。

注

1) 田中耕治（2008）『教育評価』岩波書店、83頁。

2) 清村百合子（2019）「1 スタンダードの枠組み」『学校音楽教育実践論集』第3号、日本学校音楽教育実践学会、6-7頁。

3) 西園芳信（2017）「生成の原理」『音楽教育実践学事典』日本学校音楽教育実践学会編、音楽之友社、18-19頁。